

説教余滴、「秋の歌」、2017年10月22日、

秋の唄 ポール・ヴェルレーヌ(金子光晴訳)

秋のヴィオロンが
いつまでも すすりあげてる
身のおきどころのない
さびしい僕には、
ひしひしこたえるよ。

鐘が鳴っている
息も止まる程はとして、
顔蒼ざめて、
僕は、おもいだす
むかしの日のこと。
すると止途(とめど)もない涙だ。

つらい風が
僕をさらって、
落葉を追っかけるように、
あっちへ、
こっちへ、
翻弄するがままなのだ。

秋の日の ヰオロンの ためいきの
ひたぶるに 身にしみて うら悲し。

良くご存知と思います。上田敏の『海潮音』にある「落ち葉」の冒頭です。

その後の翻訳は、どうしてもこの名訳と取り組みました。初行にもそのことがあります。

上田訳は「秋の日の」、金子訳は「秋のヴィオロンの」。堀口大学氏の鑑賞ノートによると、原作では“秋のヴィオロン”となっていて、日も風も入っていないので、以前は原作通り“秋のヴィオロン”と訳されていたそうです。けれどある日、このヴィオロンは秋風の音だと気付き、風の一字を加え、そうすることによって、最後の連の「逆風(さかかぜ)」（金子訳では、つらい風）との繋がりも妥当性を増すようになったと書かれています。

理解が深まりますよう願います。

ポール・マリー・ヴェルレーヌ (Paul Marie Verlaine, 1844 年 3 月 30 日 - 1896 年 1 月 8 日) は、フランスの詩人。ポール・ヴェルレーヌ、あるいは単にヴェルレーヌとも呼ばれる。

[ステファヌ・マラルメ](#)、[アルチュール・ランボー](#)らとともに、[象徴派](#)といわれる。多彩に韻を踏んだ約 540 篇の詩の中に、絶唱とされる作品を含みながら、その人生は破滅的であった。彼の一生には、酒・女・神・祈り・反逆・背徳・悔恨が混在した。晩年には文名を高め[デカダンス](#)の教祖と仰がれたが、初期の作品の方が評価されている。

ヴェルレーヌの「秋の歌 (落葉) (Chanson d'automne)」は 1866 年に出版されたヴェルレーヌの処女詩集『サチュルニアン詩集 (Poèmes saturniens)』に所収された作品で、ヴェルレーヌが 20 歳の時に書いた詩です。

この詩は日本では、上田敏の翻訳詩集『海潮音』(1905) に所収された名訳「落葉」で、広く知られるようになりました。

“ヴィオロン”はフランス語のヴァイオリンのことですが、上田敏の訳があまりに知れ渡っているので、“ヴィオロン”とそのまま訳される方が多いようです。

翻訳詩の出だしは、上田氏が“秋の日の”、堀口氏と窪田氏が“秋風の”と訳しています。

堀口氏訳の『ヴェルレーヌ詩集』(白風社) の、堀口氏の鑑賞ノートによると、原作では“秋のヴィオロン”となっていて、日も風も入っていないので、以前は原作通り“秋のヴィオロン”と訳されていたそうです。けれどある日、このヴィオロンは秋風の音だと気付き、風の一字を加え、そうすることによって、最後の連の「逆風 (さかかぜ)」との繋がりも妥当性を増すようになったと書かれています。

とても音楽的な詩です。

最初にこの詩に出会ったのは、もっとも有名な上田敏の訳でした。“ヴィオロンのためいき”という言葉は、どんな表現よりも、秋の哀愁を美しく表現していました。

ヴェルレーヌの 20 歳の詩ということにも、納得しました。

生命の終わりの“枯れ葉”や、昔を思い出すという表現は老人を思わせませんが。

でもやはりこの詩の中には、若さが見えます。

ヴァイオリンの音色のようなすすり泣き、黄金色の枯葉のように、哀しみさえも輝くように美しい若さ。

この詩に、フォーレの「夢のあとに」の MIDI を合わせてみましたが、この曲をヴァイオリンで聴いた時、まるですすり泣いているようだと思いました。

まるでこの「秋の歌（落葉）」のように。

落葉 ポール・ヴェルレーヌ

上田敏訳 『海潮音』より

秋の日の
キオロンの
ためいきの
ひたぶるに
身にしみて
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。